白河の翼寄

第　７７　号
令和５年３月３１日
発行人：支部長　栗林正樹
※題字：白川仁一先生
※印刷：さとう総合印刷

「回　想」

西白河副支部長　関根　善輝

会津の金山町に沼沢湖がある。この湖は昔、沼沢火山によってできたカルデラ湖で、１００年前よりヒメマスという魚が生息している。

この沼沢湖を見下ろす丘にかつて金山町立沼沢小学校があった。沼沢小学校は、昭和５５年度をもって閉校し、川口小学校（現金山小学校）に統合した。

沼沢小学校はＣ３級地。私は、新採用で昭和５３年度から３年間勤務した。そして、最後の職員になった。児童数減により１０４年の歴史を閉じた。

当時、沼沢小学校は、複式学級３（１・２年、３・４年、５・６年）、全校児童１５名前後。

複式学級では、２つの学年が同じ教室で授業を行うので、当然ながら２学年分の年間指導計画を立てる。

各授業では「わたり」及び「ずらし」で構成した授業案を常に持ち、展開していく。片方の学年で教師と児童がやりとりをしている時間に他学年は指示された学習内容を黙々と進めていく。図工、体育、音楽、家庭、道徳などは、Ａ年次、Ｂ年次方式として２つの学年を統合した学習内容を行うことも可能だった。

複式学級は、少人数であるがゆえに個別指導が徹底し、児童の進んで学習する態度も育つという利点があった。

少人数の複式学級では、集団学習をどう進めるかが課題ではあったが、町内小学校どうしの修学旅行、移動教室、体育祭、書き初め展、音楽祭などで交流した。

冬は体育科で各学年ともスキー学習を指導計画に入れた。私が初めてスキーを履いたのは、平らな校庭だった。児童達に背中を押され、転んだことが忘れられない。

校庭脇の空地にスキーに適した緩斜面が昔からあり、そこで授業を続けてきた。毎年雪がたくさん降る地区なので児童達は小さい頃からスキーに親しんできていて、どの児童もかなり上手である。私に指導できる技術は当然なかった。そこで、私自身、日曜日には金山町内にある奥只見国際スキー場（現かねやまスキー場）に地元の指導員に連れてもらって練習を重ね、たくさん指導して頂いた。おかげさまで児童達と一緒に滑れる技術を身に付けることができた。

図工の題材では、毎年冬になると「雪国の絵」を描いた。これは両沼地区児童のコンクール出品も兼ねていた。名誉会長は、あの有名な会津坂下町出身の版画家である。雪国の人々の暮らし、生活、仕事、行事、遊びなどが雪の中で力強く、趣のある絵が描かれていてとても印象的だった。

毎年一度は車でＪＲ只見線と只見川沿いの自然の美しさを見ながら、閉校となった沼沢小学校の跡地に訪れる。

閉校後すぐには校舎を宿泊施設として利用してきたが、今は取り壊された。校舎もプールも講堂もないさら地となっている。残されたものは、校門と記念碑だけである。しばらく跡地を眺めていると学校生活をした当時の様子が目に浮かんでくる。

記念碑のことばは、「温故知新」である。温故知新の意味は、以前学んだことを今また調べ、考えたりして新しい道理や知識を探ることである。この碑には学校創設にあたった方々、学校を守ってきた方々、幾多の卒業生や職員の思いが込められていると思う。そして、これからもこの地区を受け継いでいく地域の方々や後に続く人々へのよき指標となっていると思う。

《おめでとうございます》

この度、人見道雄先生が全国連合退職校長会より「賀詞」（満８８歳）を受けられました。また、併せて、瑞宝双光章（叙勲）を受章されております。心からお祝い申し上げます。

大森邦恩先生は３月３０日に８８歳のお誕生日となります。お祝いメッセージ等は次号に掲載させていただきます。

人見道雄先生

「人見道雄先生米寿・瑞宝双光章受章誠におめでとうございます」

栗林　正樹

関根副支部長と二人で矢吹町の人見先生のご自宅を訪問し、米寿の賀詞状と支部からのお祝いを贈呈して参りました。

人見先生は昭和 29 年採用、天栄村立大里小学校から 40 年に及ぶ小学校教育に邁進して来られました。その後、白河一小、そして新設校善郷小教務主任を務め、昭和 61 年大屋小教頭ご昇任、平成 3 年論田小学校長にご栄進、三神小学校長で定年を迎えられました。三神小学校長としては、交通安全無事故 2000 日達成、スクールバス実現、小教研音楽科研究指定校と、創立記念日に合わせ「校旗新調」など保護者や地域の方々のご支援ご協力の下、子供たちのために力を尽くされました。

先生の信条として、子供保護者や教職員には誠実に思いやりの気持ちを大切に、「不言実行、温和で人情を大切にする」を胸に勤務して来たのでした。当時の教職員数人も「まさにそのように子供たちにも私達にも優しく接して下さいました」と話してくれました。

退職後は中島村社会教育指導員として 4 年、矢吹幼稚園長 1 年お勤めすると、再び中島村社会教育指導員 4 年お勤めしておられます。

現在は奥様と和やかにお健やかにお過ごしでございます。部屋に「じいじばあばの絵」が飾ってあったのですが、「子供は遠く離れて住んでいますが、お知り合いのお子さんの子供さんが描いてくれました。「『矢吹のじいじばあば』と実の孫のように来るのが楽しみです。」とおっしゃっていました。ご夫妻の人柄の現れだなあと、つくづく思って戻って参りました。

人見道雄先生米寿・叙勲誠におめでとうございました。

「再任用校長の３年間を振り返って」

釜子小学校長　佐久間芳雄

＜新型コロナウイルス感染症への対応＞

令和２年度から４年度まで、再任用校長として３年間白河市立小野田小学校に勤務しました。前任校を定年退職した令和元年度末は新型コロナウイルス感染症が出現した時期で、３月上旬から全国で臨時休校となりました。卒業生・保護者・先生方のみで卒業式を行い、離任式はなしでした。４月に着任してもまたすぐに４月中旬から５月中旬まで約１ヶ月間臨時休校となり、春の運動会実施を断念し、秋に延期せざるを得ませんでした。

その後も学校行事をどうするかを先生方と話し合う日々が続きました。先生方の知恵を結集して、行事を中止にしないで実施する方法を模索しました。学校行事等の意味を問い直すことにもなりました。その中でも、特に運動会の半日開催は素晴らしい取組でした。半日でも運動会の教育効果を十分に発揮できることが分かりました。また、子ども達の負担軽減と合わせて、保護者の場所取りとお弁当作りの心配がなくなりました。今年の５月８日から新型コロナウイルス感染症は２類から５類に引き下げとなります。

まさにこの３年間はコロナ対応の日々でしたが、先生方と知恵を絞り、力を合わせて学校経営を行ったという達成感があり誇らしく思っています。

＜ＧＩＧＡスクール構想＞

文部科学省はコロナ対策もあり、ＧＩＧＡスクール構想を進め、一人一台端末を令和３年度から全国の小中学校で導入しました。小野田小学校は白河市教委から研究指定を受け、先駆けて令和２年７月からタブレット端末を使い始めました。

子ども達はあっという間にタブレット端末の使い方を覚えました。各教室にはタブレット端末とＷｉ－Ｆｉでつながった電子黒板などの大型ディスプレイがあり、子ども達一人一人の考えを映し出しながら、授業を進めることができます。英語科では児童用デジタル教科書の音声をイヤホンで聞きながら勉強しています。コロナで学校に来られなくても、Ｚｏｏｍを使って家に居ながら学校の授業の様子を見たり、意見を発表したりできます。宿題を提出するのも、タブレットのアプリを使って家から送信します。それを先生が採点して送り返すこともできます。この３年間でＩＣＴ教育は大きく進展し、時代が確実に変わるのを目の当たりにしました。

＜定年引上げ後の校長の働き方＞

令和５年１月の県教委からの通知によると、定年制度は以下のように大きく変わります。

○　令和５年４月から２年に１歳ずつ定年を引き上げ（令和５年４月の定年年齢は６１歳）令和１３年４月に６５歳となる。

○　６０歳に達した管理監督職は役職定年となり、原則として教諭等に降任する。

○　定年前再任用短時間勤務で働くことや高齢者部分休業を申請することも可能。

６０歳に達した校長が引き続き正規の常勤職員で働く場合の働き方は次の４つです。

①　降任して教諭、養護教諭又は栄養教諭として働く～６１歳から定年まで

②　暫定再任用～定年から６５歳まで（定年引上げ中のみ現行の再任用制度と同じ仕組みの暫定再任用制度が運用される）

③　特例任用～校長の欠員補充（希望者のみで選考がある、降任後や退職後は希望できない、欠員補充なので毎年あるとは限らない、期間は最長で定年まで）

④　再任用校長～令和５年度は更新者の選考のみ（令和７年度から特例任用に一本化）

皆様方のご支援のおかげで３年間勤めることができました。ありがとうございました。

「今の職業は？」

箭内　清和

退職してもうすぐ丸７年になろうとしている。もう少しで退職を迎えようとする頃、よく周りの人に「退職したら何をするんですか？」と聞かれたものである。「やりたいことが山ほどあって、終わるのにあと６０年はかかるな。」とうそぶいていた。１２０歳まで生きようとは思わないが、やりたいことがたくさんあることは今も変わらない。

そのやりたいことの一つに、「自給自足の生活」がある。自分の食べるものは、自分で作りたい。宮沢賢治は「一日に玄米四合と味噌と少しの野菜を食べ…」と言っている。昔の人は随分米を食べたのだと思う。１年間にすると、なんと３俵半（３０ kg の袋が７本）である。まずはこの「米」を作りたい。

幸い退職時にまだ父親が生きていて、２年間「米づくり」を教えてもらった。私が子どもの頃の「米作り」とは随分様子が違っていて、全てが機械化されていた。トラクター・コンバインは軽油、乾燥機は灯油、草刈り機は混合油（草刈り機も何台か必要で種類によって、オイルとの割合が異なる）、動噴も種類によってガソリンであったり、混合油であったりする。まずはどの機械にどの燃料を、どこにどんなオイルを入れたらいいかを覚えるのが大変であった。故障も度々あり、機械屋さんとも仲良くなった。

今は機械化、省力化が進み、会社勤めの合間に米をつくっている人もいて、あまり手をかけないでも米はできるが、「手をかけた分、目をかけた分が、秋にでてくる」という父親の言葉を信じて、「うまい米づくり」に取り組んでいる。

それで自分なりに工夫し、考えてやっているがこれが実に面白い。何故かというと、毎年何かしら失敗し、うまくいかないことがあるからである。そして、その原因が簡単にわからないからである。一つの事を変えて次の年やってみても、変わるのはそのことだけでなく、その年の気候や水や土もまた変化するからである。追究しても実験は年に一度しかできない。いろいろ考えを巡らせないといけないのである。なか

なかである。

猛暑の年は、「くず米」が多くなる。何故かというと、籾殻を厚くして暑さから米（子孫）を守ろうとするので、その分米の粒が小さくなるからである。冷夏は困るが、暑すぎてもだめなのだ。（水の調整も必要である。）

稲作には、「苗半作」という言葉がある。良い苗を作れるかどうかで、その年の作柄が半分決まってしまう喩えである。土づくり、籾（種子の状態）、掛ける水の量、ハウス内の温度など、きめ細かな調整が必要である。

「中干し」が大事だと聞いてやろうとした。「中干し」とは、田植えをしてある程度苗が大きくなったら、出穂の前に水を抜いて田んぼを乾かすことである。やろうとしたが、雨が多くて何年もできなかった。令和４年度は、田んぼにひび割れができるほどしっかり「中干し」ができた。そのせいかどうかわからないが、粒がそろった良い米ができた。

これから検証が必要である。（いつになるかわからないが……）

いずれは、これから米づくりをしようとする人に、「米づくり」はなあ... と講釈を垂れることができるようになりたいと思っている。

「而して、今」

後藤　さとみ

午後４時１５分、講義修了のチャイム。５階にある教室を飛び出し、階段を駆け下りる。通りに出て、下り坂を小走りすること５分、東西線W駅へ。そこから地下鉄で１５分。O駅からは、東京駅までの長ーい連絡通路を、早歩きすること、１０分。

人混みを縫い、グランスタで「よねはち」の「おこわ弁当」（季節によって内容が変わるのも楽しみ）を、２個ゲット。２１番線新幹線ホームで待っている、１７時２８分発「やまびこ１５１号」に、滑り込む。

毎週土曜日。都の西北にある大学の社会人向けの講座に通い始めて、６年になる。途中、コロナ禍で休講やzoomでの授業もあったけれど、キャンパスにも留学生の姿も戻ってきた。広場では、５・６人ぐらいの男女が楽しそうに歓談。なんか、いいなあ。「人生の春って感じ」だと、半世紀前女子大生だったおばさんは、ついつい思ったりしてしまう。

さて講座では、先生が出す課題について次週までに１本、規定字数で書いてくることになっている。受講生３０名は、その課題を頭の隅っこ、あるいは大部分に置きながらの１週間となる。「文章は、相手の心に届いて初めて完結する」というのが、先生の持論。そのためには、登場人物等についてのプロファイリングを明確にすることが大事だ、とも。

受講生のこれまでの歩みは（当然のことながら）多岐に渡ることから、その描かれる内容も、さまざま。幼少時代を銀座で過ごした人。トランプタワーに住んでいたマダム、氷見出身のヴァイオリニスト。家電企業の技術者だった大学教授。あらかたの時間を学校の中で過ごしてきた身には、どの人生も新鮮だが、共通点は、ただ一つ。これまでの人生があっての、今ここに集っているということだ。

新幹線が動き出す。黄昏どき、車窓からは北区辺りの呑み処に灯りが見えて、いい感じ。今頃の季節には、大宮付近から丹沢の山並みの向こうに赤富士が浮かび上がって、「またおいで」と言ってくれているような気もする。

課題の出来がイイセンいけていたかなあという帰り道は、ワインの一杯でも飲みながらという気持ちになるけれど、大方のところは「力不足」の３文字を背負っての帰途となる。

でも、それもいっとき。新白河で各停に乗り継ぐ頃には、お弁当の中身が気にかかり、留守番の夫に、「『而今（じこん）』冷やで、よろしくね」なんて、LINEしたりもしている。

さて、今週の課題は「魔性」。とっかかりさえ見出せないまま、締切まで、あと３日！

《ご冥福をお祈り申し上げます》

田崎　富雄先生　令和４年１２月　２日ご逝去
田崎　宏　先生　令和５年　１月　２日ご逝去
鈴木　啓司先生　令和５年　１月１３日ご逝去

《編集後記》

マスクなしで卒業式ができる時がやってきました。次年度は退職校長会の行事も再開できますように！　広報係